



JPCA

日本包装コンサルタント協会

[本部] 〒104-0045

東京都中央区築地 4-1-1 東劇ビル
(社)日本包装技術協会 内

TEL03-3543-1189 FAX03-3543-8970

[事務局] 〒214-0014

川崎市多摩区登戸 1604番地

エスカレントⅡ 205号

本石包装専士事務所 内

TEL/FAX 044-934-9341

会報 No. 16

1999年(平成11年)3月

発行者 濱口 啓一

編集者 池田 得三・本石 靖夫

目 次

巻 頭 言	会 長	濱口啓一	(1)
活動状況			(2)
本 部	副会長	原 明弘	
関西支部	理 事	塩田利一	
特別寄稿			
ふえ続けるダンボールのフルーツ	関西支部	田辺幹夫	(3~4)
会員自己紹介			(5~7)
本 部	鹿毛 剛	伊藤荘司	
関西支部	塩田利一	宮田 豊	
編集後記	事務局	本石靖夫	(7)

JPCAの運営にあたって常に心していることは、会員の総意を付託した民主的な運営であります。アンケート調査などにより会員のご意向を拝聴した結果、会員の親睦・情報交換の他に比較的若い年齢層(と言っても60歳前後)会員の各位にコンサルタント業務の開拓と斡旋を期待する声の強いことを知りました。

事業センターはそれらの声に少しでも応えることができればとの思いで組織し、今日まで有志会員の協力と努力に支えられて運営されて参りました。結果として、JPCAの外部PRに貢献した点が高く評価されるものと思っています。この間の関係会員の献身的なご協力に深謝申し上げます。

しかしながら、その結果はご期待にほど遠く、会長としての非力を只々お詫び申し上げる次第であります。

JPCAは会員数が40名にもおよばない、組織・財力ともに非力であるばかりか、会員の高齢化も進み、活力の低下を否定しえない現実に直面しています。

JPCA設立時に入会の勧誘をいただいた際の故楠田JPI副会長JPCA設立主旨とJPCAに賭ける思いを顧みると、黄泉からのお叱りの聴こえる思いがします。故楠田副会長のJPCAへの最大の期待は、包装管理士、包装専士のような専門技術者の方々の定年後の活躍の場の創出でありました。そのために包装関連企業の経営者、管理者の方々も積極的に勧誘されておられました。

JPIの多年にわたる包装管理士、包装専士養成努力は、わが国の包装関連産業の礎となり、今日に至る産業発展の原動力の役割を果たしていると言っても過言ではないと思います。また、それらのOB専門技術者は、当該産業にとって質・量ともに国際的に類例のない貴重な経営資源である、と思います。

21世紀の包装関連産業の進化と発展にはそれらOB専門技術者の地球スケールでの活用がきわめて重要な課題である、と確信しております。

それらのOB専門技術者の活躍の「場」を作り、提供する主なる役割をJPCAが積極的に演じなければならないと考えております。そのために包装管理士、包装専士、技術士および専門ビジネスマン各位の横断的連携がまず重要であります。

「志」を同じくする者が自由に集い、対話を深め、相協力して活動の「場」を創出し、活動の環を拡げていくことが基本的課題であります。このような観点から、包装管理士会、包装専士会、技術士会、コンサルタント協会を横断した結集を呼びかけたいと思っております。そして協同して事業の推進を計り、豊富な人材の活用を促進し、国内、国際共に包装関連産業の振興、発展に貢献したいものと考えております。

21世紀を指呼の間に迎え、私の果たすべき役割の一端として敢えて各位に訴えさせて頂きました。この投じた一石が波紋を呼び建設的な意見が盛んに闘わされ、結実していく事を心から願っております。

平成10年度の活動状況

1. 本部活動状況

(1)総会 5月26日、中央区立京橋区民館で開催、提出された議案通り承認された。

(2)事業センター諸行事

☆平成10年9月2日、きゅりあん(品川区立総合区民会館)を会場として「21世紀に向けての環境フォーラム」を開催しました。

☆東京パック98協賛行事

東京パック98は東京ビッグサイトで10月1日から5日まで開催され、22万人を越える入場者がありました。当協会では東ホールPR-7(従来の2倍の面積)を割り当ていただき、「21世紀 草の根相談室」という無料相談室を開催しました。

また、初日午後「21世紀へ向けての環境と包装を考える集い」を開催しました。

☆平成11年3月16日、きゅりあん(品川区立総合区民会館)を会場として、「環境との調和をめざす包装界の動向」と題したセミナーを開催。

(3)会員動向 今年度は新入会員として、鹿毛 剛氏および伊藤荘司氏を迎えました。

2. 関西支部活動状況

(1)例会

①4月7日 ・平成9年度の事業・収支報告。平成10年度事業計画と予算案承認、日本工業新聞社主催の「世界の食品衛生21展」への強力を決定。

②5月7日 ・新支部長に真多博志氏が就任
・有光副会長から4月18日に開催された理事会の内容について報告

③7月14日 ・有光副会長から総会事項の報告
・「世界の食品衛生21展」に相談所を開設した結果報告
・コンサルタントの依頼を受けた場合のフォローについての反省

④9月8日 ・関西支部新会員 宮田 豊氏入会
・会員が講師となつて行う勉強会で「清涼飲料の最近の技術動向」と題して村山涼二氏が講師を務めた。

(2)相談所の開設

5月28日～30日にインテックス大阪で開催の「世界の食品衛生21展」に無料相談所を設置し好評を得る。

(3)講演会を主催

10月15日、兵庫県立工業技術センターで、近畿包装研究会と兵庫県バイオ技術研究会との共催で「食品の安全性に関する講演会」を開催。関西支部から村山涼二氏が「HACCPへの取り組みー飲料包装技術の観点から」をテーマに講師を務めた。

(4)研修懇親会

11月18日～19日 日本のエーゲ海といわれる岡山県牛窓で開催。

参加者(敬称略):有光、真多、村山、塩田、田辺、田口(本部)、本石(本部)

特別寄稿

ふえ続ける段ボールのフルート

関西支部 田辺幹夫(田辺技術士事務所)

日本で最も普通にみられる段ボールのフルートはAフルートとBフルートで、この二つを重ねた複両面も少なくない。これにもう30年近い以前になるが、Eフルートという小さいフルートが加わって、これらが現在の日本のフルートのすべてとあってよい。

一方、アメリカやヨーロッパではAフルートは少く、CフルートとBフルートが主流である。CフルートはAとBの中間のフルートを、という要望から生まれたもので、Aフルートよりも小さい(Bフルートよりも大きい)から、箱の圧縮強さはAフルートよりやや低いが、中しん原紙の使用量は少ない(従ってコストも安い)。この中しん原紙がAフルートより少なくすむという点が省資源という観点から注目されて、日本でも一時AフルートからCフルートに乗りかえようという動きがあった。しかしこれは結局日の目をみず、現在Cフルートはごく一部にはあるようだが、Aフルートが依然として主流を占めている。

アメリカでは上記のようにC、Bフルートが主流で、それに日本より少し早い時期からEフルートが加わるという状態が長い間続いてきたが、数年前からFフルートという、Eフルートよりもっと小さいフルートが出現した。

それから後は雨後のタケノコほどではないかもしれないが、新しいフルートが次々と出て来て、最新の情報によると今アメリカではK、S、A、B、C、D、E、F、G、Nフルートがあり、このほかにもまだ次々と新しいフルートが出現しているようで、中には同じフルートに異なる名前が付いていたりなど混乱が見られるようになった。

別表はアメリカの原稿のフルートの一覧表であるが(Mead Containerboard社のRalph Young氏がまとめたもの。Paperboard Packaging Vol.83 No.8より)、TAPPI(アメリカ紙パルプ技術協会)でもこのような事態を憂慮して、これらをまとめた標準のガイドブックを作ろうという動きが出て来た。これはまだ素案の域を出ないが、段の高さ、1フィート当たりの段の数によって標準的な名称をつけてゆくというもので、現在32種類のフルートが候補にのぼっているといわれる。32種類というのは、例えばBフルートでも多少段の高さや1フィート当たりの段の数がちがうものがあるので、これを5種類に分けるといって、フルートの種類が32できるわけではない。

このようなTAPPIの動きは、フルートの規格を作るというより現在あるものを追認してまとめるという感じであるが、しかし一方では段ボールに果たしてこんなにたくさんフルートが必要だろうかという気もする。現状は各社が新しいフルートの創出しのぎをけずっているという感じで、いずれはいくつかの基本的なフルートに淘汰されるのではないだろうか。

フルートの種類

名称	段の高さ(インチ)	1フィート当たり 段の数	段線率	導入された年
K/S	0.260 ~ 0.275	25	1.55	1970
A	0.1575 ~ 0.220	30 ~ 37	1.54	昔から
C	0.142 ~ 0.145	38 ~ 41	1.43	昔から
B	0.097 ~ 0.124	46 ~ 50	1.35	昔から
D(直線)	0.086	62	---	1985
D(波形)	0.067	69	1.24	1995
E	0.045 ~ 0.062	61 ~ 95	1.27	1967
F	0.0295 ~ 0.032	106 ~ 128	1.23	90年代初期
G	0.023	146	1.19	1997
N	0.020	170	Fと類似	1996

会員自己紹介

この項は、特に最近入会された方々をお願いして、自己紹介の原稿を寄せていただいたものです。今回は4名の会員の自己紹介を掲載いたします。

1. 塩田利一氏（塩田経営事務所 所長）

- ・1997年5月に入会させて戴きました。
- ・1956年3月 昭和貿易株式会社入社。1980年までの前半は東京を拠点に、関東、東北を中心にしての営業活動。後半は営業本部に属して国内外の営業統括業務を行う。
昭和30年代は、一般産業界はもとより農業界にも木箱から段ボール箱への転換が急速に進んでいた。その段ボール箱の封緘にステープルによる新しい封緘システムを米国から日本に初めて導入したのが昭和貿易㈱で、それ以後、包装業界で外装の資材・機械の販売を担当した。平成7年7月に日本包装技術協会が発刊した「包装技術便覧」の執筆者の一人として包装材料の中で「PPバンドとテープ」を担当した。
- ・1980年から大阪本社勤務となり、人事・財務・経理・総務を担当した。
特に人事では、中堅・中小企業の給与システム、人事考課システム、昇格・昇進システム等を研究し導入につとめた。
- ・この一年間は、地元(大阪府豊中市)のローカルアジェンダー21(地球環境を守るとよなか市民行動計画)策定作業部会の中で間接的ながら初歩の正しい包装知識の啓蒙につとめている。
- ・1998年4月から、当協会の理事並びに関西支部事務局長として、当協会の活動のお手伝いしている。
- ・浅学且つ経験不足ですので一日でも早く仲間入りができるよう精進致したく宜しくお願いします。

2. 鹿毛 剛氏（鹿毛技術士事務所 所長）

包装コンサルタントとしての抱負

このたび平成10年度に入会させて頂きました。日本包装コンサルタント協会については、包装及び物流の専門集団として、業界の中で幅広く活動されていることを目の当たりに見てまいりました。私が存じ上げている人も多く、その方々が会員として活躍されており、素晴らしい協会であると思っています。

この紙面を借りまして自己紹介をさせて頂きます。パッケージングの分野については20年間の経験です。当初はビール工場でビールや清涼飲料のパッケージング部門で製造管理の業務を行い、その後、本社の容器包装部門で開発及び評価を行ってまいりました。

特にリターナブルガラスびんの軽量化、着色ガラスびんの消色化、自立型果汁炭酸飲料PETボトル、PET製BIB、ハイガスバリアー性フィルムの開発等及び使用済み

PETボトル再資源化（PETトレ、セパレートシート、プラスチック箱等）については、がむしゃらに取り組んできました。その中で、いくつかのものは既に上市されております。今後、新しい包装容器として、市場に出ていくものもいくつかあります。

外部にあつては、日本包装技術協会の包装専士「食品包装」コースの講師を10年間続けて参りました。又、日本LCA研究会で具体的にガラスびん、金属缶等のライフサイクル・アセスメントの研究を行ってきました。

退社前には品質保証部に籍を置き、品質監査、ISO 900、ISO 14000等にもタッチして来ました。従つて、食品工場の生産管理・品質管理、食品包装設計、新素材を中心とした技術開発、包装廃棄物のリサイクル等の幅広い分野においてコンサルティングができるものと確信しております。

3. 宮田 豊氏

此の度は平成10年度に入会させて頂き、先輩の皆様と共に活動できる場を与えられましたことを大変光榮に存じます。私は、二年前に印刷会社を定年退職するまでの間、実に様ざまの業務を経験しました。扱った商品は軟包装材が主体でしたが、得意先の商品企画から、包装材料の品質設計、生産管理、製造現場、果ては営業、とほぼ全職場を回りました。

そのため今になつては、自分の中心業務を何に据えるのが良いのか心配でもあるのです。これは何も生意気なことを言っているのではなく、先輩の皆様が活動しておられる現実の世界は、日々新技術が生まれ、新情報が流される生きた社会であり、今まで積み上げて来られた技術を更に新しい技術に組み立て直し、最高の品質として提供しておられる姿を目の当たりにして敬服致しております。

この厳しい業務を我が身に照らしてみますと、組織を離れた自分の力だけでどれ程の活動ができるのか心配です。

なるほどコンサルタントという業務は毎日が試練であり、しかもその場で即評価が下されるという真剣勝負だということは私なりに感じていますし、その内容が常に最高の品質でないと決して世間は許さないであろうことも十分理解しているつもりです。

このような覚悟の上で自分をしっかり見つめ直して、私の主たる業務を軟包装材の設計、製造工程の管理、に置いて精進して行くことにしたいと考えました。

どうか、先輩の皆様のお指導を賜り、私の雑駁な知識にさらなる研鑽と努力を積み重ね、役に立てる技術に仕上げて行くよう努めて参りたいと思います。

これからは会員の名に恥じぬ仕事ができますよう更に努力を重ねて参りますので何卒宜しくお願いいたします。

4. 伊藤荘司氏

このたび平成10年に入会させて頂きました。私は昭和36年に東洋製罐㈱に入社、以来37年間プラスチックフィルムとラミコンカップ(多層シートから作られるカップ)の業務を行ってきました。初めの15年間は工場で生産管理の業務、後半の22年間は技術本部で新容器の開発業務を行ってきました。平成9年9月から平成10年9月の会社定年まで、東洋製罐㈱の技術援助契約先である韓国の会社で業務を行ってきましたが、定年後も引き続き同社で業務を行っています。

私の業務は、主に食品包装分野で、材料の選定→容器の生産→生産管理→客先の充填シール技術→殺菌技術を生産現場に密着して指導できることです。現在、韓国の会社でこの経験を生かし、業務に励んでいます。

これから当分の間、韓国で仕事をするにしておりますので、経験豊富な先輩諸氏のご指導のもと、当協会会員として恥ずかしくない良い仕事をしたいと考えております。現地のホットな情報が必要な方は下記にご連絡下さい。

住所：大韓民国 忠清南道 天安市 稷山面 南山里 45-1

所属：株式会社 利生(イーセン) 包装研究所 技術顧問

TEL：001-82-417-568-7171

FAX：001-82-417-568-7175

編集後記

第13回定時総会を終え、いよいよ活動開始、と思ったのもついこの間の様。ところが今年度は東京パック開催の年、9月のフォーラム開催に引き続いて東京パックとバタバタしている内に、年度もあつと言う間に後半に突入。早速、年末の発行を目指して会員の皆様に原稿をお願いし、原稿は予定通り集まったものの、雑事にかまけてなかなか手つかずじまい。結局は、年度末の発行となってしまったこと、誠に汗顔の至りでお詫びの言葉もなし。新しい年度にはもう少し要領よく進めたい、と決意のほどを述べさせていただいて、平にご容赦いただくほかはなし。(事務局 本石記)